紀元前二〇五年のフォイニケ和約とヘレニズム諸国の外交

伊藤雅之

【要約】フォイニケ和約は、紀元前三世紀末のローマがその存亡をかけて取り組んだ第二次ポエニ戦争（前二一八―前二〇一）に付随して生じた第一次マケドニア戦争（前二一四頃―前二〇五）を終結させた条約である。先行研究は、カルタゴの同盟国マケドニアにイタリア進攻を断念させたという点から、和約をローマの東方政策の成功の結果と捉えてきた。しかし本稿は、同条約が軍事的に敗北したわけではなかったローマに領土面で譲歩を強いるものだったという点からこれに異議を唱える。そして同戦役に調停者として関ったヘレニズム諸国の反ローマ・プロパガンダと、ローマの同盟者アイトリアにおける和平派の台頭と彼らによる同国の単独講和、およびそうした状況に機敏に対応しローマの支配地を奪ったマケドニアの動きの分析から、和約が全体としては、この三者のそれぞれの目標達成と、また同時に、特に外交面でのローマの「失敗」の産物だったという結論を導き出す。

史林　九九巻六号　二〇一六年一一月

はじめに

本稿の目的は、第一次マケドニア戦争の閉幕に際してのヘレニズム諸国とローマの外交面での角逐に注目し、その中での前者の手法とその成功およびそれによる後者の相対的な失敗を明らかにし、かつその歴史的意義を論じることにある。[1]同戦役それ自体はローマにとって、カルタゴを相手に地中海西部のほぼ全域を舞台に死闘を繰り広げた第二次ポエニ戦争

の、いわば舞台裏の戦いだった。主な交戦相手であるマケドニアのフィリッポス五世は、アイトリアを相手とした同盟市戦争（二二〇―二一七）で実質的な勝利を収めて多くのギリシア国家が参加するヘラス同盟の盟主としての立場を強化した余勢を駆って、[2] カルタゴのハンニバルの攻勢にさらされ苦境にあるローマに対し前者と同盟して戦端を開いた。しかしその行動は必ずしも迅速かつ強力なものではなかった。[3] さらに二一一年のローマ・アイトリア間の対マケドニア同盟成立以降、[4] 同戦役は戦場もほぼギリシアに限定され、そしてそのままザマで敗れたカルタゴがローマに屈服するのに四年先立つ二〇五年に、歴史に名を残すほどの戦闘もなくひっそりと終結する。またその対マケドニア同盟によりカルタゴとマケドニアの連携を妨げ、かつ終戦でそれをより確かなものとしたという意味で、一見するとローマは失敗するどころか、戦略的に十分な成果をあげたようにも思われる。実際、先行研究は、ローマの同戦役の主眼はフィリッポスをイタリアでのカルタゴとの戦闘に関与させないようにすることでそれは概ね成功し、和平による終戦もカルタゴの劣勢を見てこれと手を切ったフィリッポスと、対カルタゴ戦に集中するため他の戦いから手を引きたいローマの利益が一致した結果と見ている。[5] しかしながら、戦役を終結させたフォイニケ和約は戦闘においてこれといった敗北を喫したわけでもなかったローマに勢力圏の一部をマケドニアに引き渡すことを強い、後者の東方での求心力をさらに高めるものだった。和約がローマにとって不利な面を持つことは別稿において若干論じたことがあるが、[6] 本研究ではこうした実態と、それをもたらしたのがギリシア人たちの、特にローマとアイトリアの同盟成立後の、外交だったことを明らかにする。

① なお本稿は、筆者がイギリスのエディンバラ大学に二〇一五年に提出した博士学位請求論文の一部を、加筆・発展させたものである。

② Cf. Walbank, F. W. (1940), *Philip V of Macedon*, Cambridge, pp. 15-16; Bringmann, K., von Steuben, H. eds. (1995), *Schenkungen hellenistischer Herrscher an griechische Städte und Heiligtümer. Teil 1: Zeugnisse und Kommentare*, Berlin, Nr. 135; Scholten, J. B. (2000), *The Politics of Plunder: Aitolians and their Koinon in the Early Hellenistic Era, 279-217 B. C.*, Berkeley, pp. 227-228. なお本稿に登場する年号はいずれも紀元前のものである。

③ フィリッポスは二一六年から二一四年にかけてローマ傘下のアポッロニアの近辺でローマ軍と交戦したものの、海軍が貧弱であったため戦果をあげられなかった (e. g. Liv. 23. 38-39, 24. 40, Polyb. 5.

109–110)。またその後、北方の港湾都市リッソスを占領しイタリア進軍の拠点こそ確保したものの、矛先をメッセニアにも向けるなどしてローマ側を積極的に攻撃しようとはしなくなる（Plut. *Arat.* 49–50; Polyb 8. 8. 1–9, 12. 1, 13. 1–14. 11)。

④ この同盟成立の事情に関しては、拙稿「紀元前二一一年のローマ・アイトリア同盟」『西洋史研究』新輯第四一号（二〇一二）、三一—五六頁を参照されたい。

⑤ E. g. Rich, J. W. (1984). 'Roman Aims in the First Macedonian War' *PCPhS* 30, pp. 126–180. Eckstein, A. M. (2008). *Rome Enters the Greek East: from Anarchy to Hierarchy in the Hellenistic Mediterranean, 230–170 BC*, Oxford, p. 77, 89–90, 92–93, 104–107, 112–118, 199, 203, 236, 285.

⑥ 拙稿「ローマ外交と紀元前二〇〇年晩秋の開戦—第二次マケドニア戦争をめぐって」『史学雑誌』第一一九編第十号（二〇一〇）、一二—一五頁を参照されたい。

第一章　ヘレニズム諸国における和平の動きとその展開

第一節　調停者たちの出現とその思惑および外交手法

初めに議論の起点として、アイトリアが参戦する二一一年から二年ほどの戦争の流れについて概説しておく。まずローマと同盟した同連邦は、ローマと連携してマケドニアの同盟国アカルナニア攻撃に着手した。これはフィリッポスが素早い対応を見せたことですぐに中止となるが[①]、連邦軍はそのままローマ軍と共同作戦を続け、二一〇年にコリントス湾北岸のアンティキュラを占領した[②]。そして二〇九年までにはエリス、メッセニア、アッタロス朝ペルガモンとスパルタがアイトリアの友邦として参戦し[③]、多方面からマケドニア側を攻撃する形勢となる。ところがフィリッポスの反撃が始まると、アイトリアにおける反マケドニア勢力の領袖の一人トリコニオンのドリマコスの部隊とローマ軍の妨害にもかかわらず[④]、テッサリアのエキノスがまず占領され[⑤]、またその西方のラミア付近でも連邦主席政務官であるストラテゴスを務めるピュッリアスが、アッタロス朝のアッタロス一世とローマから派遣された支援部隊と共に敗走を強いられる[⑥]。こうした反マケ

ドニア陣営の苦戦が目立ち始める中で登場するのが、プトレマイオス朝、アテナイ、キオス、そしてロドスの使節団である。リウィウスの伝えるところでは、彼らは「フィリッポスとアイトリア人たちの間の戦争を止めるため」[7]、つまりは調停のため現れた。そしてこの時の交渉は問題の二者がそれぞれ提示した条件が合わなかったため失敗に終わるものの、この後も彼ら（便宜上、これ以降「調停者」とひとまとめに呼ぶ）は年によって顔ぶれはやや異なるものの、ほぼ終戦まで一つの勢力として戦争の行方を左右していくこととなる。本稿がまず注目するのは、このヘレニズム諸国の調停の動きである。

彼らの活動が及ぼした影響を明らかにするため最初に目を向けたいのは、彼ら調停者たちがそもそもどういった思惑からこの戦争に介入したのか、そして先に示したリウィウスの彼らについての言及の中に、フィリッポスとアイトリアの名があって、後者の他の同盟者、とりわけ軍事的に大きな存在感を持っていたはずのローマの名がないのはなぜか、という点である。実はこれらについてW. HußとA. M. Ecksteinは、調停者たちは戦争の中でアイトリア人たちがしばしば行ったとされる海賊行為により、自分たちがエーゲ海で行う交易に悪影響が生じることを懸念し、その一方で陸上の状況については特に利害関係や関心がなかったが故に、アイトリアとフィリッポスのみを交渉相手にしたという可能性を提示している[8]。しかし商業的利益の保全がこの戦役における調停者たちの一番の関心事であったということを裏付ける史料は特にない。何より、ローマは彼らが現れる二〇九年まででさえ頻繁に海軍を動かしており、またアッタロス朝もその参戦後すぐの時期に三五隻の艦隊を出撃させていることからもうかがえるように[9]、それなりの規模の艦隊を以前から保有し[10]、当然そのことは周辺各国に特に秘密にはされていなかっただろう。つまりマケドニアとアイトリアが和解しても、ローマとアッタロス朝が前者と交戦状態にある限りギリシア近海は特に安全とはならず、また同時代人たちにもそれは自明のことだった。交易が調停者たちの主たる関心事であったというのは、彼らの二〇九年の行動への適切な説明とはいえないだろう。

となると有効と思われるのが、調停者たちの二〇九年の言動を政治的な利害の面から考えるというアプローチである。

これは既にいくつかの先行研究でも試みられているが、[11] この方向の妥当性は特に、リウィウスが彼らの登場に触れるところで、「ただし（彼らにとって）総じて問題なのは、他のギリシア人たちよりも好んで紛争を起こすアイトリア人たちではなく、フィリッポスと彼の王国が、その自由にとって危険となるほどに、ギリシアの情勢に密接に絡み合わされていくことがないように」することだったと述べている点から確かめることができる。[12] つまり調停者たちは、対アイトリア戦がフィリッポスに有利なものとなればなるほど、彼がヘラス同盟の盟主であることもあって、アイトリアなど反マケドニア陣営はもとより、その他のギリシア人にも大きすぎる影響力を持つようになると危惧していたわけである。この調停者たちの動機に関する記述の情報源は、リウィウスのこの時代についての主要史料にして、現代でも全体としてその伝える内容の信憑性の高さが認められているポリュビオスであるといわれている。[13] 実際、アイトリアに対する好戦性の指摘を含めた総じて冷淡な姿勢は、同連邦への彼の否定的な評価と、折に触れてそれを読者に印象付けようとする著述スタイルとよく重なる。[14] また何より、調停者たちがマケドニアの拡大抑止を一番の目的としていたと見ると、この二〇九年の彼らの行動はもちろん、終戦までのそれについても整合的な説明が可能となる。

まず前述のリウィウスの記述にある、調停者たちがアイトリアとフィリッポスを交渉相手と見做し、ローマやその他の勢力が一見、彼らの関心の外にあるような状況についてであるが、そもそも調停者たちがギリシアにやって来た時点において、ローマおよびアッタロス朝の人員はギリシア本土にはほぼいなかった。[15] またアイトリアに味方したスパルタは隣接するマケドニアの同盟者アカイアと戦端を開いたばかりであり、同じくアイトリア側のエリスも同連邦の力を借りつつやはりアカイア領で掠奪を始めるというような状況で、ギリシア近辺のアイトリア・マケドニア両陣営の多くは本格的な戦闘状態になかった。[16] 要するに二〇九年の調停者たちの行動は、劣勢が相対的に、それもマケドニアに対し際立っているアイトリアをまず休戦させようというもので、ローマをはじめその他の勢力に声がかからなかったのは、物理的にそれが難しかったのと、単純に軍事・外交面でその必要性が低かったためというように理解することが出来る。

この見方は、ポリュビオスがこの時期の状況を記した巻の残存断片中の、調停者たちを交えた会談の模様を伝えたと思しき箇所から否定されるように思われるかもしれない。というのも、そこでは一人の弁者が、目下の戦争はギリシア人に犠牲を強いローマ人に漁夫の利を得させるだけであると発言しているからである。[17] もし彼が調停者たちの一員であった場合、彼らは当初から少なくともローマには反感を抱いており、それ故彼らはローマにこの時声をかけなかったというようにも考えられるからである。[18] しかしこの可能性は否定することができる。Ecksteinが既に指摘しているように、[19] まずこの弁者がどこの国の者なのかは史料中には明示されていない。そしてこの人物は、アイトリアが勝った場合でも得をするのはローマであると述べるところで、挿入的に同連邦の勝利の可能性を「神々のもとで是とはされない」と述べている。[20] これは少なくとも建前上は中立の立場を示したであろう調停者側の発言としてはいかにも不自然である。これらを踏まえると、問題の主張はこの時点の調停者たちのものではなく、アイトリア陣営の分裂を図るマケドニア、ないしはその同盟者のものと見るべきだろう。

調停者たちの目標があくまでマケドニアの勢力拡大の阻止であったことは、二〇八年になって彼らが前年とは一転してローマや他のアイトリアの同盟者とも接触を持ったことと、その際の状況からも裏付けられる。この時には戦況がマケドニア陣営にとって不利となっており、そうした中での和平にフィリッポスが消極的であったため交渉は再び物別れに終わったものの、調停者たちがアイトリアで催した和平条件を検討する会議にはローマやアッタロス朝の代表も加わっているからである。[21] Ecksteinは、調停者たちは包括的な和平を特に求めていたわけではなく、この二国がこの時の交渉に加わっているのは、彼らが連邦を訪れた際にたまたま両国の代表者がそこに居合わせたからではないかと考えている。[22] しかし調停者たちは和平提案を連邦領ヘラクレイアで行ったのであるが、それがこの地でなされたのは、主だったアイトリア人たちがそこで戦争の今後について話し合う予定であることを聞きつけたからだった。同会議は連邦が通常年に二度開催した総会だったと思われるが、リウィウスや、この会議のことを知ってフィリッポスが同地の急襲を試みたことを記してい

るポリュビオスの単語の用法が、必ずしも当時の連邦の意思決定機関や会議の名称を厳密に踏まえたものなのかが判然としないため、この点については確証が持てない[23]。しかし外部に容易に知られるほど大きな会議であり、また戦争の今後が議題であることも分かっていた以上、調停者たちは連邦の同盟者たちがそこに同席していることも予測できたはずである。となると、ローマやアッタロス朝が和平案検討の会合に参加したのは決して偶然ではない。ここで調停提案がなされれば彼らがそれを察知し関係者として交渉に加わろうとすることは確実であり、アイトリアおよびマケドニア以外と関りを持つことを望まなかったのであれば、調停者たちはそもそもこのタイミングで和平を打診しようとは考えなかっただろうからである。

そして調停者たちの狙いがフィリッポスの勢力拡大阻止であったとすると、二〇九年とは一転してアイトリアの同盟者たちを交渉に引き込むことは、非常に合理的だった。というのもこの二〇八年には、ローマとアッタロス朝の海軍が既にギリシア沿岸部で戦闘を再開しており、さらにイリュリアの指導者スケルディライダスとプレウラトス父子やトラキアのいくつかの集団が対マケドニア戦に動き、またスパルタやエリスなども健在であり、フィリッポスは同盟者たちの支援要請などにも応えつつ各地を転戦して回ることを余儀なくされていた[24]。もしこの時彼とアイトリア人たちのみの間で和平が成立した場合、その条約は後者に有利なものとなっただろう。しかし彼は残りの反マケドニア勢力との戦闘をアイトリアの圧力が消えた分より容易に進められるようになり、結果としてむしろマケドニアの拡大を助長してしまうかもしれなかった。反マケドニア陣営が一様に振るわないようであれば、より敗色濃厚なところから戦線離脱させることが同王国の勢力拡張を最小限に止める方策だったといえるが、二〇八年の状況では、可能な限り包括的な和平を実現させることが、調停者たちの目的がマケドニアの拡大阻止であった場合、最もそれに合致した行動だった。

そして調停者たちの行動原理に関するこうした理解は、続く二〇七年からの彼らのローマに対する姿勢と、それに対するローマ側の対応が彼らとの関係にどう影響したのかという点をも整合的に説明してくれる。まずこの年から、調停者た

ちの一角であるロドスの代表トラシュクラテスが交渉の席でアイトリア人たちに対し、ローマ人の占領した諸都市における振舞いは「蛮族のそれ」であり、連邦のローマとの同盟は「全てのギリシア人たちにとっての大きな禍の端緒」であると論じるなど、調停者たちがアイトリアに対しローマと断交してマケドニアと和平を結ぶようにと勧めるようになる。[25] 実のところ、こうした発言が実際になされたかどうかという点には一考の余地がある。ローマはギリシアにやがて害をなす蛮族でありギリシア人はこうした外敵を前に団結すべきであるという主張は、アイトリアとフィリッポスの間で戦われた同盟市戦争末期の二一七年に戦争終結を説いたアイトリア人ナウパクトスのアゲラオスの演説や、この第一次マケドニア戦争に際しスパルタに反マケドニア行動を促すアイトリア使節への反論として展開されたアカルナニアのリュキスコスの演説でもほぼそのまま登場しており、[26] これらの記録を残したポリュビオスの、ローマ人のギリシアの自由の破壊者としての側面を読者に示そうという意図に基づく史料操作があったようにも思われるからである。[27] ただし先行研究は基本的に、演説中の個々の文言についてはさておき、調停者たちを含め同時代のギリシア人たちのうちに反ローマ的な声があったことは特に疑問視していない。[28] ローマが東方に派遣した部隊が作戦行動の中で複数のギリシア人都市に被害を与えたことは疑いようがなく、それを批判的に捉える人々がいたことは想像に難くないからである。

また何より、こうした声を利用してアイトリアにローマと手を切り停戦するよう促すことは、この時点の戦況を踏まえると、マケドニアの拡張を抑える上では最善の手だった。この二〇七年、アイトリア側は前年とは一転して苦境に立たされていた。まずアッタロス朝が、隣国にしてマケドニアの同盟国であるビテュニアの攻勢を受けギリシア戦線から離脱する。[29] スパルタでも同じくフィリッポスの友邦アカイアとの戦闘で指導者マカニダスが敗死し、アイトリア自体もフィリッポスに連邦の宗教的中心で定例総会が毎年開催される場所でもあるテルモスまで踏み込まれるほどの痛手を受けていた。[30] 調停者たちとしては、特に連邦がマケドニアに対しこれ以上敗北を重ねる前に戦争を終結させるか、あるいはいまだ大きな敗北を喫していないローマが大規模な増援を派遣するなどの形で戦線にテコ入れをすることを期待しただろう。

そして重要なのは、ローマ側がこうした状況で調停者たち、そして苦境にあえぐアイトリア人たちの期待に対し全く配慮を示さなかった、より正確にいえば、外部の人々をローマにとって有利な方向に誘導しようという発想や技術を十分に持っていなかったことである。アッピアノスによると、調停者たちを交えてアイトリア市民たちの前で行われた会議で、二一五年度にプラエトルとして派遣されて以来東方を担当していたM・ウァレリウス・ラエウィヌスに代わってアンティキュラ戦後から東方派遣部隊をプロコンスルとして率いていたP・スルピキウス・ガルバ（二一一年度コンスル）は[31]、「和平交渉は自分の権限のうちのことではないと述べ、その一方で密かに元老院へと書簡を送ってアイトリア人たちがフィリッポスと戦い続けることがローマ人たちにとって好ましいと伝え、これを受けて元老院も彼に対しいかなる条約をも結んではならないという正式な命令を発することとした」という。[32] ガルバはある種の法律論を持ち出して和平交渉の進展を阻害し、おそらくローマ本国が増援を派遣するまで時間稼ぎをするか、あるいはより単純かつ冷酷に、アイトリアの犠牲のもと、可能な限りローマのリソースを割くことなく、そしていずれにせよ、できるだけ長くフィリッポスをギリシアにおける戦闘と交渉に拘わせることを企図し、ローマ本国もこうした方針とやり方を是としていた。しかし前任者ラエウィヌスはアイトリアとの同盟交渉の際、連邦総会の場で市民たちを前に様々な条件に触れつつ条約について論じた。[33] そうしたローマの前線指揮官の行動を、多くのアイトリア人および調停者たちは見聞していたはずである。ガルバのロジックは、目前の交渉を遅滞させるには有効だったかもしれないが、彼らの不信を買っただろう。またアッピアノスは、ガルバの書簡を受け取った後に元老院はすぐに増援を送ってエペイロスを攻撃させたが戦線を維持できず間もなく撤退したと同じ章で伝える。傍証がなく研究者たちは一般にこの作戦の事実性そのものを否定しているが、[34] 仮に事実であったとしても、ローマ側はアイトリアの苦境を救うのに全体として消極的であったといえる。そしてこうした姿勢は、それがもたらすだろう結果、つまりは連邦のさらなる被害への予想と併せて、アイトリア人および調停者たちを大いに失望させただろう。

調停者たちによる、ローマをギリシアの敵と非難しつつアイトリアに戦争終結を勧めるという行動は、こうしたローマ

の姿勢に対応してのものであったといってよい。調停者たちとしては、ローマとの間に本質的な利害の対立はなく、むしろ同国がマケドニアに軍事面でいくらか優勢である方が好ましかっただろう。しかしローマが状況を覆すほどの積極的な行動を起こさず、アイトリアや調停者たちの利益に配慮する姿勢も見せない以上、同連邦だけでも戦線を離脱させることがマケドニアの拡張を多少なりとも抑えることに繋がる方向性だったからである。

一見すると、ローマ軍によるギリシア人への被害が疑いなくあった以上、調停者たちがローマ人をギリシアに害をなす異邦人と論じたのは単なる外交戦術上の行動ではなく、実際に反ローマ的な機運が調停者やその他の国々で高まっていたからという可能性もあるように思われる。しかしもしローマの攻撃でギリシア人が被害を受けたことが、調停者たちにとって本質的な問題であったなら、この二〇七年以前にもそれに関する批判がなされていただろう。実はトラシュクラテスの演説は、ローマの「野蛮な」振舞いの例としてオレオスとアイギナの占領の際の市民への加害行為をあげているのであるが、両市の制圧はそれぞれ二〇八年と二一〇年のことだからである。[35] 調停者たちのローマへの批判は、二〇七年の戦況判断とあくまでマケドニアの拡大を最小限に止めようという目標に基づく、ad hoc な弁論戦術の産物だった。

そして実際、調停者たちのこうした議論は、この時のアイトリアにとって有効な助け舟となるものだった。ギリシアの敵に利するところがないようにすべきという主張は、軍事的に劣勢な同連邦にも名誉ある停戦を可能とするが、アイトリア人たち自身は実は同盟市戦争の際のアゲラオスのようにこの大義を「思い出す」ことができなかったからである。アイトリアは今回の戦役に先立って、総会の場ではっきりと非ギリシア人であるローマと同盟することを決定した。マケドニア側にこの点を指摘された場合、仮に連邦側がギリシアの結束を声高に叫んでも苦しい交渉になることは必至だった。またそれをマケドニア側から「思い出させられる」わけにもいかなかった。内容がどうあれ、フィリッポスやその同盟者が持ち出した主張を受け入れることは、マケドニア側の立場により理があることを認めることになるからである。特に今回の場合、二一〇年頃に前述のようにマケドニアの同盟国アカルナニアのリュキスコスがスパルタの対マケドニア戦参加を

思い止まらせようと試みた際にこの大義を持ち出し、そしてその交渉に同席したアイトリア使節がそうした彼の弁論を明確に否定する立場を大勢のスパルタ人の前で示していた。[36] 調停者たちが持ち出したことでアイトリアははじめて、ギリシアのためという大義のもと名誉ある和議を結ぶことを論じることができるようになったわけである。

第二節　調停者、フィリッポス、そして和平派アイトリア人の連携

重要なのは、こうした調停者たちの動きに、前述のローマとは対照的に、柔軟かつ親和的な対応をする人々がギリシア側に多数いたことである。まずフィリッポスが、こうした調停者たち、さらにはある意味でアイトリアにも配慮した姿勢を見せる。彼は調停者たちの前で既に何度か和平に前向きなことを明言していたが、この二〇七年には、連邦領への攻撃を続けて軍事的優位を固めつつ、わざわざ調停者たちがアイトリア人たちに和平を勧める場に使者を送って、連邦が望むなら自分としても和平に異存はないと表明したからである。[37] これはアイトリアが調停者たちの説く大義を受け入れた場合、フィリッポスもそうした彼らのお膳立てした和平を承諾し、アイトリアを公式に屈服させるという形での終戦は求めないと約束することを意味した。こうした姿勢は同連邦や調停者たちの利害や体面に配慮したものだったといえるが、彼にとっても有益だった。マケドニアはここ数年、連邦やローマに便乗した多くの勢力の攻勢を受けており、[38] ギリシア方面での終戦は軍事的な負担やリスクを大きく減らすことにつながるからである。また戦役をマケドニア有利のうちに、そして調停者たちとも少なくとも表面上協調しつつ終結させることで、和平条約がどのようなものとなるにせよ、フィリッポスはヘラス同盟の加盟国、そして何よりギリシアを守った者として、各国に対する求心力を高めることが期待できた。調停者たちの目的や振舞いをどう見ていたかは不明だが、彼らの行動とおそらくその原理を踏まえつつ、フィリッポスは表向き彼らやアイトリアに柔軟な姿勢を見せ、なおかつ表立っては語られない自国の利益をも最大化できるよう行動していたといえる。

そしてこうした調停者たちとフィリッポスのある種の連動は、アイトリア国内にも影響を及ぼした。アッピアノスによると、おそらく同じ年度のうちにもう一度催された公開の交渉の場で調停者たちが「フィリッポスとアイトリア人たちの諍いがギリシア人たちのローマ人たちへの隷属をもたらすことに繋がるのは明らかであると説き、…スルピキウス（・ガルバ）がこうした者たちに反論しようと登壇したところ、聴衆はもはや彼の言うことを聞こうとせず、使節の者たちは真実を述べていると叫んだ」というからである。[39] 一見すると、ガルバはたまたま興奮した市民たちに発言を妨害されただけのように思われるかもしれない。しかしギリシアにおいて戦争が続くことを期待するガルバやローマに反感を抱くアイトリア人はこの時期、ローマ・アイトリア同盟を主導した反マケドニア的な指導者たちとは一線を画す人々により組織化され、その勢いを増しつつあった。

例えば、*IG* IX の編者 G. Klaffenbach の推測が正しければ、二〇八／七年にはアイトリアの次席政務官ヒッパルコスにダモクリトスが就いている。[40] 彼は二〇〇／一九九年にはストラテゴスを務め、その際、第二次マケドニア戦争が勃発したのを見てアイトリア人たちの多くがまたもフィリッポスを攻撃しようと主張するのを押し止めるべく動いたことが知られている。[41] リウィウスは、これは彼がフィリッポスから密かに金品を贈られたためと噂されたと伝えているが、一九〇年代になってアイトリアが反ローマ色を強めた際にその指導者の一人となり、一九三／二年には二期目のストラテゴス職まで得ている点を踏まえると、[42] 政治指導者となって早い段階から、ローマとの協調を図る人々とは一線を画していたと思われる。もし彼が以前にローマ寄りの立場を明確にしたことがあったなら、一九〇年代に他の指導者たちとの競争を制してストラテゴス職を獲得できたとは考えにくいからである。ダモクリトスのヒッパルコス就任には二〇八／七年ではなく二〇九／八年という可能性もあるが、[43] いずれにせよ彼の同職獲得は、戦争が続く中でローマと結んで対マケドニア戦を進めた人々とは別の勢力が連邦内で台頭していたことを示すものといえる。[44]

さらに二〇七／六年にはヒッパルコス職をカリュドンのアレクサンドロスが得ている。[45] 彼は第一次マケドニア戦争後の

二〇五／四年に、戦争を推進したドリマコスおよびその一族で同志のスコパスがアイトリア人たちの負債減免を図った際[46]、これに反対する運動の先頭に立ち、アイトリアでの自身の将来に見切りをつけたスコパスが連邦を去ったと思しき翌二〇四／三年にはストラテゴス職に就いた[47]。この争い自体は、負債の主因が対マケドニア戦であったとはいえ、基本的には内政問題への対応をめぐる路線の対立だったといえる。しかしアレクサンドロスは第二次マケドニア戦争後の一九六／五年に再びストラテゴス職を得た際、使節を派遣してローマや他のギリシア諸国に対し、同戦役におけるアイトリアの貢献に対し十分な見返りがなかったと不満を表明している[48]。また同ストラテゴス任期中に、一九一年にローマからアイトリアの反ローマ戦争の責任者として名指しされることになるディカイアルコスと共に[49]、周辺国の者への連邦市民権付与を通して連邦の勢力強化を進めてもいる[50]。これらを踏まえると、やはりこのアレクサンドロスも、二〇〇年代においてもローマとの協調を是とするような姿勢を見せなかった人物だったと思われる。

この二〇七／六年のヒッパルコス職は、あるいは連邦全体のそれではなく、連邦内の一地方当局のそれであったかもしれない。アレクサンドロスのヒッパルコス在任を記す *IG* IX. 1². 1. 31には彼と並んで、前述のドリマコスがストラテゴスではなくブラルコス（*βολάρχος*）として登場しているからである[51]。しかし仮にそうであっても、やはりアレクサンドロスの登場は、ドリマコスらローマと協調してマケドニアを討とうという人々の勢いが弱まっていたことの証といえる。ドリマコスの出身地トリコニオンやアレクサンドロスの出身地であるカリュドンは連邦初期以来、そしてこの二人と並んで第三の名祖政務官グランマテウス職保有者として登場するファイネアスの出身地アルシノエは二二〇年代以来、アイトリア全体のストラテゴスを継続的に輩出した[52]、いわば連邦の中核地域だった。たとえ一地方当局の政務官であったとしても、こうした重要都市を含んだ地域での政務官の選出状況は、連邦市民の少なくない部分の政治動向を反映していると見てよい[53]。二〇七年の交渉の場におけるガルバへの明確な敵意の表明も、こうした、対マケドニア戦を主導する者たちとは一線を画す人々が、調停者たちの和平の動きをある程度組織的に歓迎したが故のものといってよいだろう。

ただしマケドニアとの戦争継続を是とするアイトリア人たちの声も、戦況がフィリッポスに有利でローマも状況を大きく変えるほどには軍を出さなかったにもかかわらず、なお強力だった。今しがた見たアレクサンドロスのヒッパルコス職と並んでドリマコスがブラルコスとして登場したことや、またおそらく二〇二／一年に、少なくとも第一次マケドニア戦争後にそのドリマコスが四期目のストラテゴスを務めたと記録されていることから二〇〇年代前半のどこかで彼が同職三期目を務めたと思われることを踏まえると、[54] ドリマコスらは依然として政務官職を継続的に押さえられる状況にあったといえるからである。そして二〇七年の調停の試みが、ガルバに対し市民たちのうちからあからさまな敵意が示される一幕がありながらも、経緯は不明ながら実を結ばず終わっているのも、[55] こうした状況によるものだろう。調停者たちが持ち出した議論はアイトリアに名誉ある終戦を可能とするものだったが、劣勢な中での和平は、それでもやはり連邦や戦争を主導した人々の立場を、フィリッポスや、ローマとの協調路線から距離を置く人々に対し弱めることが予想されたはずである。今しがた出てきたドリマコスやその支持者たちは、そうした事態は認められないと考え、自分たちの目下の優位を活かし、和平実現を妨げたのだろう。

しかしその一方で、交渉の場で対マケドニア戦を推し進めようとする人々とは一線を画すアイトリア人たちが公然と調停者たちの主張に賛意を示し、ガルバ、およびローマを実質的にギリシアの敵と宣言したことは、第一次マケドニア戦争におけるローマの外交的な敗北を方向付けた画期的な事件だった。和平派アイトリア人とでも呼ぶべき彼らは、なお連邦内の多数派を占めるほどではなかった。そして彼らはそもそも戦況がおもわしくない中で徐々に数を増やした現状に不満を持つ人々であったことから、対マケドニア戦を推し進めるドリマコスやスコパスのような明確な指導者や、マケドニアを倒してアイトリアのギリシアにおける覇権を打ち立てるというような、人々を結集させるような目標も持っていなかった。しかし調停者たちが用意したローマからギリシアを守るという大義は、彼らに調停者たちやその主張に既に同調しているフィリッポスと協調してのギリシア防衛という、戦争継続に代わる具体的な政治目標を与えた。そして彼らが調停交

渉というある種の国際会議の場で反ローマの叫びをあげたことで、既にこの大義を唱えていた調停者たちとフィリッポスも、こうした和平派アイトリア人たちと国の枠を超えて協調することが決定づけられたといえる。この三勢力の間に事前あるいは事後の統一的な話し合いや合意があったという証拠はない。しかし調停者たちとフィリッポスとしては、自分たちが公の場で提示しあるいは支持した、ローマを敵と見做しギリシアでの諍いを止めるという主張に明確に賛同した和平派アイトリア人たちを無視することや、主張や立場の変更を行うことは体面上できなくなったからである。これにより第一次マケドニア戦争は、ギリシアの防衛と反ローマで結束あるいは固定されたこの三勢力と、軍事的劣勢に苦しむアイトリアの戦争推進派およびローマ人の対峙という局面に移行したといえる。

① Liv. 26. 25; Polyb. 9. 40. 4-6.

② Liv. 26. 26. 1-4; Polyb. 9. 39. 2. Cf. Walbank, F. W. (1967), *A Historical Commentary on Polybius, vol. 2*, Oxford, p. 179. ローマ・アイトリア同盟条約の内容については Austin, M. M. (2006), *The Hellenistic World from Alexander to the Roman Conquest: a Selection of Ancient Sources in Translation, second edition*, Cambridge, no. 77を参照されたい。

③ Eckstein, A. M. (2002), 'Greek Mediation in the First Macedonian War, 209-205 B. C.' *Historia* 51, p. 273. 付け加えると、アイトリアの北隣のアタマニアも三世紀の最後の十年頃、アイトリアが実質的に管理下に置いていたデルフォイのアンフィクティオニアに役員（*ἱερομνήμων*）を送っていることからして、この頃同連邦に対し友好的な姿勢を示すようになっていたと思われる（*CID* IV. 86 I. 9）。このことは、二〇六年頃にフィリッポスがザキュントスを与えるまで同国がマケドニアの味方になることを明言しなかったことからもうかがえる。Liv. 36. 31. 11; Fine, J. V. A. (1932), 'The Problem of Macedonian Holdings in Epirus and Thessaly in 221 B. C.' *TAPA* 63, pp. 143-145; Oost, S. I. (1957), 'Amynander, Athamania, and Rome' *CPh* 52, pp. 3-4.

④ ドリマコスの経歴については Grainger, J. D. (2000), *Aitolian Prosopographical Studies*, Leiden, pp. 155-156' および拙稿［二〇一二］第二節を参照されたい。

⑤ Polyb. 9. 42. 1-4.

⑥ Liv. 27. 30. 1-3. なおアッタロスは名誉職としての色合いが濃厚であったがピュッリアスと並んで二一〇／〇九年度の連邦ストラテゴスに選ばれていたらしい。Grainger, J. D. (1999), *The League of the Aitolians*, Leiden, p. 319.

⑦ Liv. 27. 30. 4-15, esp. 4. Cf. Ager, S. L. (1996), *Interstate Arbitrations in the Greek World, 337-90 B. C.*, Berkeley, no. 57.

⑧ Huß, W. (1976), *Untersuchungen zur Außenpolitik Ptolemaios' IV*, München, p. 167; Eckstein [2002], pp. 273-276.

⑨ Liv. 28. 5. 1.

⑩ Allen, R. E. (1983), *The Attalid Kingdom: a Constitutional*

History, Oxford, p. 68.

⑪ Cf. Ager [1996], pp. 159-160.

⑫ Liv. 27. 30. 5.

⑬ Walbank [1940], pp. 89-90; Eckstein [2002], p. 274.

⑭ E. g. Polyb. 4. 3. 1, 5. 107. 5-7.

⑮ Liv. 27. 30. 11. Cf. Gruen, E. S. (1984), *The Hellenistic World and the Coming of Rome*, Berkeley, p. 530.

⑯ Liv. 27. 29. 9, 31. 9-10; Polyb. 9. 30. 6. Cf. Walbank [1967], p. 169.

⑰ Polyb. 10. 25. 1-5.

⑱ Cf. Schmitt, H. H. (1957), *Rom und Rhodos*, München, p. 195.

⑲ Eckstein [2002], p. 276. Cf. Walbank [1967], p. 229.

⑳ Polyb. 10. 25. 5.

㉑ Liv. 28. 7. 13-15.

㉒ Eckstein [2002], pp. 282-283.

㉓ Liv. 28. 5. 13; Polyb. 10. 42. 4. Cf. Larsen, J. A. O. (1952), 'The Assembly of the Aetolian League' *TAPA* 83, pp. 19-22; Walbank [1967], pp. 257-258.

㉔ Liv. 27. 31. 9-33. 5, 28. 5. 1-6. 12, 7. 1-12; Polyb. 10. 41-42. Cf. Walbank [1940], pp. 93-96.

㉕ Polyb. 11. 4-6, esp. 5. 6, 9. なおこのトラシュクラテスの名はギリュピオスの写本断片の欄外に記されたもので、ロドス代表というのも推測であるが、説得力ある反論を展開する材料もないため一般にこの同定に従って多くの研究者は話を進める。Champion, C. B. (2000), 'Romans as BAPBAPOI : Three Polybian Speeches and the Politics of Cultural Indeterminacy' *CPh* 95, p. 434.

㉖ Polyb. 5. 103. 9-104. 11, 9. 32-39, esp. 9. 38. 1-39. 6. Cf. Deininger, J. (1971), *Der politische Widerstand gegen Rom in Griechenland, 217-86 v. Chr.*, Berlin, pp. 25-34.

㉗ Cf. Baronowski, D. W. (2011), *Polybius and Roman Imperialism*, London, p. 149, 207.

㉘ E. g. Champion [2000], pp. 429-437, Eckstein [2002], p. 290.

㉙ Liv. 28. 7. 10. Cf. Habicht, Ch. (1956), 'Über die Kriege zwischen Pergamon und Bithynien' *Hermes* 84, pp. 92-95.

㉚ Plut. *Phil.* 10; Polyb. 11. 7. 2-3, 11. 1-18. 10. Cf. Eckstein [2002], p. 292 n. 79. マカニダスについては Walbank [1967], p. 255を参照されたい。またスッセニアやエリスなど他の反マケドニア勢力の活動も、この時期にはほとんど史料に現れなくなる。

㉛ Cf. Liv. 26. 26. 1-4.

㉜ App. *Mac.* 3. なおこの記述を二〇七年の状況のものと捉えることの妥当性については Eckstein [2002], pp. 284-288を参照されたい。

㉝ Liv. 26. 24. 2-13.

㉞ Rich [1984], pp. 143-144; Eckstein [2002], p. 285.

㉟ Polyb. 11. 5. 8. Cf. Walbank [1967], p. 276.

㊱ Polyb. 9. 28-39. Cf. Wooten, C. (1974), 'The Speeches in Polybius: an Insight into the Nature of Hellenistic Oratory' *AJPh* 95, pp. 239-240; Dany, O. (1999), *Akarnanien im Hellenismus: Geschichte und Völkerrecht in Nordwestgriechenland*, München, pp. 157-158.

㊲ Polyb. 11. 6. 9-10. Cf. Liv. 27. 30. 14, 28. 7. 15-16, 8. 1-6; Walbank [1967], p. 277.

㊳ 例えば、マケドニア北方のタルダニア人やマエティと表記されるトラキア系の集団の活動は、フィリッポスに度々ギリシア方面での戦闘の中断を余儀なくさせている。Just 29. 4. 6; Liv. 26. 25. 3, 7, 27. 33. 1; Blinkenberg, Ch. (1941), *Lindos. Fouilles et recherches, 1902-1914. Vol. II, Inscriptions*, Copenhagen, no. 2 col. C ll. 127-131. 最後にあげ

たリンドス碑文についてはBurstein, S. M. (1985), *The Hellenistic Age from the Battle of Ipsos to the Death of Kleopatra VII*. Cambridge, no. 46も参照されたい。

㊴ App. *Mac.* 3.

㊵ *IG* IX. 1². 1. 31 l. 61.

㊶ Liv. 31. 32.

㊷ Briscoe, J. (1973), *A Commentary on LIVY Books XXXI-XXXIII*, Oxford, p. 138.

㊸ Grainger [2000], p. 71, 141.

㊹ ヒッパルコスの具体的な職権や選出方法は分かっていない。Cf. Larsen [1952], pp. 1-7; Grainger [2000], pp. 50-52; Scholten [2000], p. 26, 66. しかしアイトリアの碑文において名祖政務官として登場する際には、基本的にストラテゴスと共に表記されるので、これと同じく毎年秋ごろに選ばれたことは間違いない。またヒッパルコス就任者の名前で判明している者がそもそも少ない中で、ここで登場したダモクリトスを含め、複数のヒッパルコス経験者がその後ストラテゴスに昇っている。Grainger [2000], pp. 70-71. さらに、三世紀中頃のものではあるが、アカルナニアと結んだとある条約において、連邦代表としてストラテゴス以下十数名の政務官の名が並ぶ中でも、ヒッパルコスは二番目に登場している。*IG* IX. 1². 1. 3 ll. 16-22. これらは同職が実権を持ち、市民の強い支持があってはじめて得られるもので、決して名誉職やストラテゴスが自由に任免できる単なる副官ではなかったことを示すといえる。アカルナニアとの条約については、Schmitt, H. H. (1969), *Die Staatsverträge des Altertums Bd. 3: Die Verträge der griechisch-römischen Welt von 338 bis 200 v. Chr.*, München, Nr. 480も参照されたい。

㊺ *IG* IX. 1². 1. 31 ll. 75-76.

㊻ Polyb. 13. 1a, cf. 4. 5. 1. また拙稿［二〇一一］註三五も参照されたい。

㊼ *IG* IX. 1². 1. 95, 192. Cf. Walbank [1967], p. 413; Grainger [2000], p. 71, 90; Kotsidou, H. (2000), *Τιμὴ καὶ δόξα. Ehrungen für hellenistische Herrscher im griechischen Mutterland und in Kleinasien unter besonderer Berücksichtigung der archäologischen Denkmäler*, Berlin, Nr. 108.

㊽ Liv. 34. 23. 5-11. Cf. Briscoe, J. (1981), *A Commentary on LIVY Books XXXIV-XXXVII*, Oxford, pp. 85-88.

㊾ Liv. 36. 28. 3; Polyb. 20. 10. 5.

㊿ *IG* IX. 1². 1. 30 ll. 10-16. なお Ibid. 31 ll. 11-17は、同年度中に彼が、ディカイアルコスが関わった様子はないものの、おそらく同じような目的から、外国市民へのプロクセニア認定を行ったことを伝えている。

(51) 同役職の一般的なありようについてはSherk, R. K. (1990), The Eponymous Officials of Greek Cities: I' *ZPE* 83, p. 259; Scholten [2000], pp. 62-63を参照されたい。

(52) Grainger [2000], p. 49.

(53) もっとも、この三名が名祖政務官として言及されている箇所の後には、アイトリア連邦のプロクセノスとして認定された者やその保証人（ἔγγυος）の名などが言及され、さらにそれに、連邦政務官が名祖として記されつつアイトリア市民権付与などを扱った別の年度の記述が続くことから（*IG* IX. 1². 1. 31 ll. 74-105）、ドリマコスら三名も、何かしら変則的な事情を抱えつつも、やはり連邦政務官であったとも考えられる。

(54) *IG* IX. 1². 1. 30. Cf. Grainger [2000], p. 156.

(55) Eckstein [2002], p. 291.

第二章　ローマの孤立とフォイニケ和約

第一節　アイトリアの講和

ここからは前章の議論を基に、ローマへの姿勢が対立軸として大きく浮かび上がってきた状況の中で、アイトリアで和平派がついに政権を握り、それにより同連邦が単独で対マケドニア戦を離脱するという事態が出来したことと、それを活かしつつフィリッポスが事実上の勝者として対ローマ戦をも閉幕させたということを論じたい。ローマ側はこの段階においてもギリシア情勢をそれほど重視しなかったものの、同地において特段の軍事的失敗を犯すこともなかった。しかしアイトリアの和平派、調停者たち、そしてマケドニア陣営は、外交および政治の舞台での直接・間接の連携により、連邦の戦争推進派を追い落とし、またこれと結んでいたローマを、開戦時の勢力圏の一部放棄、および限りなく敗者に近い形での撤兵へと追い込んでいく。こうしたことを明らかにするため、まずは二〇六年のアイトリアのマケドニアとの講和への動きに注目してみたい。

この時期のアイトリアの状況を考える上で重要なのは、二〇六／五年度の政務官の顔ぶれとその政治的立場である。そしてこれらを探る手掛かりを得るためまず見てみたいのが、リュキアのクサントスのとある碑文である。[1] 同碑文はアイトリア連邦の加盟国の一つドリスのキュティニオンが、連邦の口添えを得つつクサントスに、神話で語られる同族関係の誼で損壊している市壁の修復のための支援をしてほしいと求めたことを記している。最初に注目すべきなのは、碑文の冒頭七行にプトレマイオス四世の統治一七年目とはっきり記されている点である。これにより、碑文を作成したクサントスがそこに刻まれた文書作成の時点においてプトレマイオス朝の宗主下にあり、かつ同文書が二〇六／五年のものであることがまず確定できる。[2] さらにまた六七行目から七一行目に目を向けると、この件に関しアイトリアが行った決議と「ストラ

テゴスの者たちとシュネドロスの者たちにより記された書簡を」石碑に刻むと決定されたことが記されており、それを受けて七九行目から八八行目に掲載されたその書簡部分の冒頭を見ると「アイトリア人たちのうちに属すアゲラオス、パンタレオン、モロッソス、およびシュネドロスの者たちが」というように書かれている。「ストラテゴスの者たち」とあるものの、アイトリアには名誉職のような場合を除いて一名を超える、まして三名のストラテゴスが置かれることはなかったので、書簡冒頭部の三名は二〇六／五年のストラテゴス、ヒッパルコス、グランマテウスと見てよいだろう。

問題は彼らの政治的立場である。注目すべきなのは、碑文の内容と、クサントスの宗主国プトレマイオス朝が調停者たちの主要な一角を占め二〇七年にも使節を派遣していたこととの関わりである。[3] クサントス碑文はキュティニオン側が、市壁の本格的な破壊が第一次マケドニア戦争期ではないとはいえマケドニアによるものであることに触れつつ、自分たちに好意的に対応することはアイトリアに対してそうすることと同じでありまたプトレマイオス朝の意向にも沿うことなのだと論じ、クサントス側もその主張を受け入れ、資金不足を表明しつつも、借財を行って五〇〇ドラクマと少額ながらともかく援助を行い、[4] また使節の者たち個々人にも贈物をしてその好意を得ようと努めたことを記している。[5] キュティニオン側は神話に記された同族関係を押し出してこそいるものの、明らかにアイトリアとプトレマイオス朝が親しい関係にあることを踏まえつつ後者に従うクサントスに援助を迫り、クサントス側は気乗りしないながらもこれに可能な限り応える姿勢を見せたわけである。こうしたクサントス側の気の遣いようは、本碑が建立されたことと併せて、プトレマイオス朝が時のアイトリア当局との関係を非常に重視していたことと、それが周囲にも広く知らされていたことを示す。本碑の文書においてこの両国の親密さに触れているのはアイトリア傘下のキュティニオンの方であるものの、神話の時代に遡らなければ繋がりが主張できない、つまりある意味で長らく疎遠だった相手を渋々援助をすることを、クサントス側が要請者側の言い分を聞いただけで決めたとは考えられないからである。そしてこうした状況は、二〇六／五年のアイトリア指導部が、二〇七年にガルバを批判した人々と同じく調停者たちと歩調を合わせ、のみならず彼らの勧めるマケドニアとの和

平に関し具体的かつ友好的な交渉を行っていたことを示唆する。後述する対マケドニア戦後のスコパスのように、反マケドニア派として活動した者でもプトレマイオス朝と友好的な関わりは持ち得たものの、現在進行形で自分たちの奉じるギリシア防衛と反ローマの大義に逆行する者たちにまで、同王朝が親和的な姿勢を見せたとは考えにくいからである。

ただしそれでもこうしたやり取りだけでは、時のアイトリア指導部と調停者たちの友好的な関係を確認することはできても、前者がそれまでの指導部とは異なり、後者の求めるマケドニアとの和平実現にも真剣に取り組んだと確信をもって論じるには、なお証拠不足のように思われる。そこで目を向けるべきなのが、二〇六／五年度政務官筆頭として、つまりストラテゴスとして、このクサントス碑文に登場するアゲラオスである。ここに出てくるアゲラオスは二二〇年代後半に二期目[6]、二一七／六年度に三期目のストラテゴスを務めたナウパクトスのアゲラオスという可能性も否定できないが、想定される年齢からすると、二一四／三年にヒッパルコスを務めたアルシノエのアゲラオスと見る方がより相応しいと思われる。[7]そして、仮に前者であった場合でも、前述した、異国人に対抗すべくギリシアが団結するため同盟市戦争を終結するよう説いた二一七年の演説があることから、その再登場は反マケドニア派政権崩壊を示すといえるのであるが、よりありそうな後者の場合でも、同様の状況を読み取ることができる。彼がヒッパルコスになった二一四／三年には、アイトリアでは同盟市戦争が実質的な敗北に終わった結果、それを主導した反マケドニア派の影響力が低下していた。[8]こうした時期に政務官職を得たアルシノエのアゲラオスが、反マケドニア派色を押し出す人物だったとは思えないからである。

そしてさらにこのクサントス碑文と併せて注目したいのが、そのアルシノエのアゲラオスのヒッパルコス在任期間の二一四／三年中にアイトリアが、少なくとも二〇七年にプトレマイオス朝と共に調停のため使節を派遣したミュティレネの外交官一般への不可侵を約束している点である。[9]ミュティレネ側はこれに謝意を示し、アイトリア人たちを顕彰した。この時、個人として名をあげられているのはこの年五度目のストラテゴスを務めていたパンタレオンと使節の者たちだけなのであるが、[10]おそらくアルシノエのアゲラオスもミュティレネ人たちとコネクションを形成した。顕彰対象の記述には、

「プロエドロスの者たち」という文言があるからである。古典期のアテナイのように、こうした名称の役職が当時のアイトリアに存在したということは、管見の限りでは確認できない。アッピアノスは第二次マケドニア戦争の帰趨を定めたキュノスケファライ戦後の会議に関する記述において、アイトリア代表の一人アレクサンドロスをὁ τῶν Αἰτωλῶν πρόεδρος というように、定員一名のプロエドロスという名の役職があって彼がそれを務めていたかのようにも見える表記をしている。[11] しかし同会議におけるアレクサンドロスのことを記している同時代人のポリュビオスは、彼が「イシオスと呼ばれた」と記してはいるものの、[12] 同席したストラテゴスのファイネアスとは異なり特に役職には言及していない。前述のクサントス碑文での「ストラテゴスの者たち」という語の用法も踏まえると、ミュティレネ碑文の作成者やアッピアノスのプロエドロスへの言及は必ずしもアイトリアの官制を正確に反映したものではなく、漠然とストラテゴス以外で同連邦が国家としての意思を決める際にそれを先導する者という意味合いで同単語を用いたと見ておくべきだろう。実際、ポリュビオスも同じところでアレクサンドロスを「有能で弁が立つと見做されていた人物」と述べており、さらにまた戦後体制を決める会議の場にストラテゴスと共に出席しているところからして、彼が連邦指導層の中で特に上位の者であったことは間違いない。そしてこうした状況に鑑みると、ミュティレネ碑文において顕彰されている「プロエドロスの者たち」には、当時パンタレオンに次ぐ立場だったアゲラオスも含まれているといえるだろう。さらに二〇七／六年のプロクセニア認定に関する記録で保証人の一人にパンタレオンの息子フュラクスの名が出ていることからして、[13] この時点でパンタレオンは非常な高齢により引退していたかあるいは没していたと判断でき、この時期には政務官経験も加味すると、おそらくアゲラオスがミュティレネと関係の深いアイトリア指導者の中の最上位の人物だった。アルシノエのアゲラオスが二〇六／五年のストラテゴスであった場合、クサントス碑文に見られる活動のみならず、こうした調停者の別の一角との浅からぬ関係からしても、同職就任はナウパクトスのアゲラオスの場合と同様、連邦における和平派の政権獲得の証といってよいだろう。[14]

そして、アイトリアの和平派と調停者たちのこうした活発な動きとは対照的に、ローマとアイトリアの戦争継続派の連携は低調だった。ドリマコスらがローマに救援を求めなかったとは思えないが[15]、少なくとも二〇五年になるまで元老院はもとよりガルバ率いる東方派遣部隊も目に見える活動をアイトリア近辺では行っていない。これは決して対カルタゴ戦の緊迫の度が増しローマに対マケドニア戦へ注意を向ける余裕がなかったからではない。元老院はこの時期イタリア中部においては安全が確保されたと判断し、なお南部を占領し続けるカルタゴ軍とは直接対決を避けつつも、離反した地域の再征服を着実に進めていた[16]。もちろん、長引く戦争による生産活動停滞からくる物資および資金の不足という問題が生じていた可能性は高い[17]。さらに対マケドニア戦を担当することになった部隊には元々イタリア南岸に目を光らせるという役目もあった[18]。しかしイベリア半島でもローマの優勢が明確になっていたことも踏まえれば[19]、ギリシア方面でのローマ側の行動の自由の度合いは軍事的に、そして当然外交面でも、むしろこれまでになく高まっていたといってよい。

こうした状況にもかかわらずギリシア方面でローマの動きが停滞していた理由について、史料は何も語っていない。一見すると、ガルバ本人をめぐる政治的、あるいは健康上の問題に答えが見いだせるようにも思われるかもしれない。この後すぐの二〇五年度には、ガルバに代わってP・センプロニウス・トゥディタヌスが新しい指揮官として派遣されるからである。しかし彼は後にガルバがコンスル（二期目）として第二次マケドニア戦争開幕のため奔走した折、東方各国の支持取り付けやローマの政治的スローガン周知などを行うための使節に起用される人物なので[20]、この二〇五年の人事がガルバを追い落とそうという動きの産物であったとは思えない。またガルバ本人が二〇三年にディクタトルに指名されている点からして[21]、彼の政治的立場やあるいはまた健康不安が時間的にそう離れていない二〇六年頃に問題となっていたとも考えにくい。これらを踏まえると、当時の反マケドニア陣営の停滞は、単にガルバや他のローマ指導層がリスクの高い作戦の実行を躊躇、あるいはそれを求める動きを抑制し、かつ代って外交面で状況を動かそうという発想や技術も乏しく、結果としてアイトリアの戦争推進派をも軍事・国内政治両面で身動きできない状態に追い込んでいたことによるのだと見て

おくべきだろう。

二〇六年のこととされるアイトリアのマケドニアとの単独講和は[22]、こうした複数の要素が絡み合った結果だったといえる。交渉の具体的な流れやその内容は知られていない。しかしフィリッポスは、新たに指揮官となった前述のトゥディタヌスのもとでローマ軍がイリュリア方面で行動を再開した頃に交渉を妥結させたという[23]。また二〇五年の秋以降には二一一年のローマ・アイトリア同盟の推進者で第一次マケドニア戦争後には借財に苦しむ市民の救済を訴える、前述のスコパスがストラテゴスに就任したものの同運動に失敗して、ないしは同職をあと一歩のところで取り損ね、かつ債務救済運動の挫折もあってエジプトへと去るという出来事があったことが、彼が後に同地を治めるプトレマイオス朝に仕官したという話と共に知られている[24]。これらを踏まえると、和平の成立は二〇六年というよりは二〇六／五年度の冬の終わりから、遅ければ夏までにかけてのことだっただろう。また既に見た通り、マケドニアとその同盟者たち、調停者たち、アイトリアの和平派の間には、異邦人であるローマに漁夫の利を得させずギリシアの団結を回復するという建前が共有されていた。アイトリアは少なくとも公式には敗者としては扱われず、多大な賠償金や領土の割譲を求められもしなかっただろう[25]。さらに同連邦の和平派、ないしは和平成立を目指すことを軸に集結した人々に限っていえば、戦争が明らかに勝利とは言えない形で閉幕することが確定したことで、連邦内の反マケドニア派、あるいはそうした政治方針を柱とした、同盟市戦争期以来の連邦の重鎮ドリマコスやスコパスのグループの力を削ぐことができたといえ、国内政治的には勝利を収めたとさえいえる[26]。フィリッポスにしても、完全勝利とはいかなかったものの、元々マケドニアとアイトリアとの戦争に関していえば、後者がローマと結んで攻撃を加えてきたことで始まったものなので[27]、それを止めさせただけでもギリシアの同盟者たちに対しては十分に面目を施すことができた。調停者たちとしても、アイトリアの勢力後退とフィリッポスのそれの伸長の程度をいくらか緩和でき、彼が他勢力を圧倒する最悪の状況を回避するという当初の目的は一応達成できた。反異邦人の大義が持ち出される中で形成されたこれら三勢力の、いわば三方一両損ともいえる外交的提携でもって、ギリシア本

土における戦役は終了したといえる。

第二節　フォイニケ和約とマケドニアの外交

第一次マケドニア戦争を閉幕させたフォイニケ和約は、こうした文脈の中で成立した。ローマはアイトリアとの同盟以前のように、カルタゴとの戦争が続く中でマケドニアの攻勢にもさらされる可能性がある状況に再び置かれた。ガルバの後任である前述のトゥディタヌスは、新たな作戦の開始を伝え、自軍の一部を見せつつアイトリアに再度の共闘を呼び掛けたが、和平派が大きな力を持つようになっていた時の連邦政府はこれを無視し、さらにフィリッポスがアポッロニア方面へと進軍してきたため、後退して防戦に徹さざるを得なかった[28]。カルタゴの脅威は既に大幅に低下していたとはいえ、以前と違って東方で有力な支援者を見出せる可能性がなくなり、軍事・外交の両面でローマは孤立した。

しかし一方でフィリッポスにとっても、追い込まれたためとはいえ守りに入ったローマとの改めての対戦は必ずしも好ましい状況ではなかった。ローマ軍を速やかに破れず戦闘が続いた場合、アイトリアでそれに乗じて和平を破棄しようという動きが出てくることが懸念されていたからである[29]。実際、アイトリア市民の負債減免運動が成功すれば、スコパスやドリマコスが再び連邦内で主導権を握る可能性はあった。また既に見た通りスコパスは程なくエジプトへと去ることになるが、*IG* IX の編者である Klaffenbach の推測が正しければ、ドリマコスの方は四期目と史料に明示されたストラテゴス職を二〇二／一年に務めており[30]、借財問題が彼らの思うように進まなくとも、反マケドニア派ないしはドリマコスとスコパスに率いられていた集団の力はなお強大だった[31]。

こうした状況を動かしたのは、またも調停を申し出た者たちだった。ただし今回それを担ったのはエペイロスである。同国の代表者たちはトゥディタヌスに対し、ローマとマケドニアの衝突により自分たちに被害が出ていることを訴え、フィリッポスと交渉して終戦の道を探るよう求め、次いでフィリッポスにもトゥディタヌスと会見するように要請した。両

者ともこれにすぐに応じ、エペイロス側は自国の重要都市フォイニケを会談の場所として提供した。[32] エペイロスの申し出はローマとマケドニアに戦闘地域の人々の苦境を救うために矛を収めるという、体裁の良い停戦理由を与えたといえ、両者ともこれによって長引いても状況が好転する見込みの乏しい軍事状況の解消を図ったといえる。

重要なのは、両国が同じような思惑から応じたこの調停が、アイトリアを停戦へと誘った調停者たちのそれのように、実は決して単に紛争当事者の間に入りその利害調整を促すというものではなかった点である。これから述べる状況からしてローマ側はそれを理解していなかったと思われるが、まずそもそもエペイロスはマケドニアが盟主であるヘラス同盟の一員で、[33] 決して第三者的な立場にはなかった。実際フィリッポスは明らかにこの繋がりを利用し、交渉を有利に展開させた。彼はフォイニケに入るとまずエペイロスの政務官たちと「予備交渉を行い」、その上で表向きは調停者たる彼らと、そしてつい先頃ザキュントスを彼から贈られマケドニア寄りとなったアタマニア、およびヘラス同盟加盟国にして数年前にローマに領土の一部を奪われたアカルナニアの代表を同席させ、自らに有利な交渉の舞台を用意しつつトゥディタヌスとの会見に臨んだ。[34] さらに交渉が始まると、話し合いの発起人として議長役にごく自然と就いたエペイロス人たちが改めて自分たちの苦痛を考慮して戦争を終結させるよう求めた上で、明らかにローマ側に対立解消のための案の提示を求めた。[35] フィリッポス側のそれは一切伝わっていないからである。そしてこれはエペイロス人たちとフィリッポス、そしてローマ側に無言の圧力をかける役割を果たしただろうアタマニアとアカルナニアの代表たちによる、トゥディタヌスに一定の譲歩を促すためのある種のトリックだった。建前とはいえエペイロス救済を謳って停戦交渉に臨んでいる以上、交渉のテーブルの状況をどう見たにせよローマ側は和平に対し前向きな姿勢を示さざるを得ないからである。事実彼は、「もしローマに送られる使節が元老院から承認を得たなら、パルティニとディマッルム、バルグッルム、エウゲニウムがローマに属し、アティンタニアがマケドニアのものとなる」というように、軍事的に明確な敗北を喫していたわけではなかったにもかかわらず、第一次イリュリア戦争以来ローマの勢力圏だったアティンタニアの放棄を提示している。[36] 同地はフィリッポ

スのローマ側への攻勢で、早いうちに占領されていた。[37] 奪回には戦争の継続か交渉により彼にこれを放棄させる必要があったが、先に和平と戦闘地域のエペイロスの人々の苦痛の、そして間違いなく同席者にしてエペイロスの隣人たるアタマニアとアカルナニアの人々のそれの早期解消にも前向きな姿勢を示す必要に迫られたことから、トゥディタヌスとしてはこの時点でローマ側の手にないものの返還を要求することができなかったのである。

こうした分析は、推測に基づく部分があまりに多く、異論の余地が少なからずあるように思われるかもしれない。例えば、史料に記されていないだけで、実はフィリッポスが先に和平案を提示した、あるいはまたローマ側がある種の妥協を含んだ案を先に示したが、そうした状況が彼にとって特に意図して作られたものではなく、彼の方でも独自の提案を行ったという見方も、一見できそうである。しかしそうした状況であったなら、トゥディタヌスはフィリッポス案の不当性と和平への消極的な姿勢を非難するという形を取りつつ、双方の戦争前の支配地保全を主張しただろう。ローマは軍事的に敗北したわけではなかったので、交渉を呼びかけた人々に配慮する姿勢を一度示しさえすれば、その後はより自由に、少なくとも原状復帰を主張することは可能だったはずだからである。またローマ側から提示したものでなければ、そうした状況で支配地の放棄がなされることをローマ本国の人々が納得するとトゥディタヌスが考えたとも信じ難い。その後のローマにおける批准の可否をめぐる投票で全てのトリブスが賛成票を投じたとあることとも併せ、[38] 和平は史料にある通りトゥディタヌスがまず和平に前向きな、それでいて本国にも容認されそうな案を提示し、フィリッポスがこれをすかさず受け入れまとまったと見るべきだろう。そしてマケドニア側はエペイロスの調停者たちとその他同席者たちの有形・無形の支援を確保することでこうした流れを作り出し、まんまと占領地の確保に成功したわけである。

アティンタニアがローマに多大な貢納を行っていた、あるいはそこに軍の重要な基地が置かれていたという情報はなく、同地の放棄はローマにとってさしたる損失ではなかったと思われる。またフィリッポスはこれ以前に、イタリアへの進軍の拠点となり得るリッソスを放棄していたらしく、[39] ローマにとって彼と戦い続ける軍事的必要性は既にほとんどなかった。

しかし内実はどうあれ、アティンタニアは開戦前にローマから取り上げるとフィリッポスがハンニバルとの同盟条約の中で明示していた、つまり自陣営の者たちに制圧を宣言していた地域の一つだった。[40] ローマが同地の放棄を約束したことは、彼に戦争である程度の勝利を収めたと彼らに主張することを可能にしたといえる。

そしてフィリッポスとさらに条約締結の枠組み作りにも関わったはずのエペイロス人らは、こうした、マケドニアがやや優位な形で終戦を迎えたことを周囲にアピールするということに明らかに利益を見出していた。このことは、条約成立に際し副署名がなされる運びとなった点から確かめることができる。リウィウスは、「条件がまとまると、ビテュニア王プルシアス、アカイア人、ボイオティア人、テッサリア人、アカルナニア人、エペイロス人たちが王の側で署名を行い、ローマ人たちの側ではイリオン人、王アッタロス、プレウラトス、ラケダイモン人たちの僭主ナビス、エリス人、メッセニア人、アテナイ人たちが署名した」と伝える。[41] 条約締結に際しこうしたある種の証人を交えるというやり方は、ギリシアの外交スタイルに則ったものとされている。[42] 実際、同時代のローマの他の条約にこの種の存在は確認されない。そして重要なのは、ローマ・マケドニア双方とも副署名者が概ねそれぞれが共闘関係を持ったことがある者たちなどで構成されていながら、アイトリアの名が見えない点である。

同連邦は前記の通りマケドニアと講和していたが、同盟国だったローマが自分たちと同様に同王国と和平を結ぶのであるから、本来ローマ側で署名することが、理論的・道義的にごく自然のことだったはずである。そうしたアイトリアが条約締結の場に名を連ねなかったことは、同連邦が、ごく普通に行えた友好的な姿勢さえ最早ローマに示す気がなく、表立ってそれを見せる程ではないとはいえ、相対的にマケドニア寄りとなっている、つまりその主張や立場により理があると見做していることを間接的に表明するものだったといえる。ローマ側の副署名者の中にはアッタロス朝のようにアイトリアが反マケドニア勢力糾合に動いた結果ローマと共闘関係に入った勢力もあったが、[43] そのアイトリアが今はローマを支持していないことが明らかになることは、反マケドニア陣営の分解、つまり敗北を同時代人たちに印象付けただろう。こう

した事態が生じた要因が、フィリッポスらがアイトリアにそれを求めたからなのか、あるいは反ローマを掲げつつ政権を握り、さらに負債減免運動を頓挫させていた和平派アイトリア人たちが自発的にそうしたからなのかは分からない。ただ、副署名者を置くことが交渉の中で取り上げられた際にアイトリアに打診が全くなかったとは考えにくいことから、このギリシアの外交スタイルに則った条約締結を求めただろうフィリッポスとエペイロス人たちは間違いなく、同連邦の不参加を条約締結が実際になされる前に認識あるいは手配・確認し、それが周囲にどう読み解かれるかを熟知した上で、副署名者を交えた形での調印をそのまま敢行したといえる。

またマケドニア側の副署名者の初めに並ぶプルシアスとアカイアが、それぞれアッタロス朝とスパルタを相手に勝利といってよい戦果をあげていたことも、フィリッポスの優位を周囲に印象付けるのに一役買っただろう。アカイアがスパルタの指導者マカニダスを敗死させたことは既述したが、プルシアスの方もこの時期アッタロス朝のミュシア地方の支配地を切り取っていた[44]。こうした副署名者たちの状況も、優勢な同盟者たちの支持を集めているフィリッポスもまた、劣勢に立たされている者たちのそれを得ているローマに対し優位にあるという外観を形作ったといえる。

少なくない数の先行研究はさらに、ローマ側の署名者は実際にはより少なく、リウィウスがローマ側のそれが劣勢気味なだけでなく数も少ないことを祖国ローマにとって不名誉なことと考え、そうした状況を多少なりとも糊塗するため、例えばイリオンとアテナイの名を、実際には当該戦役中のローマとは特段の関わりもなかったにもかかわらず付け加えたと見ている[45]。もっとも、ローマはこの時期アッタロス朝と小アジアのマグナ・マテル招来のための交渉を行っているので、その使節がペルガモンを訪ねる道すがらアテナイとイリオンに署名を求めることは可能だっただろう[46]。しかしいずれにせよ、マケドニア側が副署名者を交えることで、軍事的には必ずしも優勢とはいえなかった対ローマ戦を、アティンタニアをともかくも手に入れたことと併せて、あたかも相当な優位のうちに終えたように同時代人たちの前で演出したことは間違いないだろう。

ローマがこの時期に至るまで外交運営、特に共同体外の人々への働きかけに関し、ギリシアとは相当に異なる様式や文化を築いていたことを踏まえれば、[47]調停者たちが反ローマの大義を掲げ、それをアイトリアの和平派など多くのギリシア人たちが団結の口実として利用したことも含め、ここまでに見てきたようなヘレニズム諸国の外交の舞台での仕掛けの一つ一つは、ローマ人たちの注意をそれほど引くものではなかったかもしれない。実際、既に見たように、ローマの人々は条約を批准した。その上トゥディタヌスは、ローマにいなかったにもかかわらず、続く二〇四年度のコンスルに選出され、帰国後に特に波乱もなく同職に就任している。[48]アフリカに進軍してカルタゴとの戦争に決着をつけることを一番に望んでいたローマの人々が、[49]フォイニケ和約によるマケドニア戦争終結を歓迎したのは間違いない。

しかしそうしたローマ側でも、特に交渉に直に関わった者たちは、おそらく自分たちがギリシア人たちにより外交の舞台でいいように翻弄されたことに気付いただろう。実際、アッピアノスは「（ローマ・マケドニア）いずれの側も、この条約が善意に基づいたものではなく長くは続かないだろうと考えていた」と、[50]トリブス民会の投票状況からして多くのローマの市民たちが和平を喜ぶ状況だったにもかかわらず、記している。もちろんこれは当該戦役終結に関する全般的な状況を述べたもので、さらにまた程なく勃発する第二次マケドニア戦争に関する、紀元後二世紀に活動した彼から読者への、ある種の予告としての意味も含まれていると思われることから、必ずしも和約やそれにまつわる外交についての当時のローマ（およびマケドニア）人の認識を特に反映したものとはいえない。それでも、フォイニケでの交渉において和平条件提示を求められた流れや、反ローマを唱えるようになったアイトリアの副署名への不参加、さらにそうした中でフィリッポスとエペイロス人らがなおも副署名者を並べることを止めなかったことや、また調停者として登場したはずのそのエペイロス人がマケドニア側の副署名者として条約締結の場に立ったのを見て、ローマ側の戦争指導者たちは遅まきながらも状況を理解したはずである。またフィリッポスらも、彼らの態度からそのことを察知しただろう。アッピアノスの叙述への評価はともかく、まさしく両者は相互に相手の悪意と再戦の萌芽を感じつつ、一方はギリシアを守り侵略者の支配地の

一部をさえ奪った者として、もう一方は和平がイタリアの安全に多少なりとも寄与することと同胞たちの多くが終戦を支持していることをせめてもの慰めにその場を後にし、やはり後世のローマ人の視点からいうところの、「最初の」ローマ・マケドニアの衝突を終えたのである。

① Bousquet, J. (1988), 'La stèle des Kyténiens au Létôon de Xanthos' *RÉG* 101, pp. 12-53; *SEG* 38. 1476.

② Scholten [2000], pp. 170-171. 碑文の内容や神話に記された絆、およびそうしたロジックを用いた外交手法については Ma, J. (2003), 'Peer Polity Interaction in the Hellenistic Age' *Past and Present* 180, pp. 9-13 および Chaniotis, A. (2009), 'Travelling Memories in the Hellenistic World' in Hunter, R., Rutherford, I. eds. *Wandering Poets in Ancient Greek Culture: Travel, Locality and Pan-Hellenism*, Cambridge, pp. 249-255 も参照されたい。

③ App. *Mac.* 3.

④ Cf. Bousquet [1988], p. 44.

⑤ *SEG* 38. 1476 ll. 38-40, 52-65, 93-99, 108-110.

⑥ Rigsby, K. J. (1996), *Asylia: Territorial Inviolability in the Hellenistic World*, Berkeley, no. 67.

⑦ *IG* IX. 1². 1. 31 ll. 146-147. Cf. Grainger [2000], p. 82.

⑧ 前掲の拙稿［二〇一一］四二一四四頁を参照されたい。

⑨ App. *Mac.* 3; Polyb. 11. 4. 1.

⑩ *IG* XII. 2. 15 ll. 1-6, 20-23, 27-30. Cf. Jördens, A., Becht-Jördens, G. (1994), 'Ein Eberunterkiefer als "Staatssymbol" des Aitolischen Bundes (IG XII 2, 15). Politische Identitätssuche im Mythos nach dem Ende der spartanischen Hegemonie' *Klio* 76, p. 172; *SEG* 44. 688. パンタレオンがアゲラオスのヒッパルコス在任時に五度目のストラテゴス職を務めたことは *IG* IX. 1². 1. 31 l. 145 から確認できる。

⑪ App. *Mac.* 9.

⑫ Polyb. 18. 3. 1.

⑬ *IG* IX. 1². 1. 31 ll. 80-82, 86-88.

⑭ 二〇六／五年のヒッパルコスとグランマテウスのパンタレオンとモロッソスについては、クサントス碑文以外では、その政治的背景を分析できるほどの材料は管見の限りでは見つからない。Cf. Grainger [2000], p. 241, 261. なお前章註三で取り上げた *CID* IV. 86 はテルフォイのアンフィクティオニアがキオスから役員として派遣されたポリュカリデスなる人物を顕彰したことを伝えている。キオスも調停使節を派遣した国々の一角であり（App. *Mac.* 3; Liv. 27. 30. 4; Polyb. 11. 4. 1）、もし最近の研究者が推測するように、同碑文が単に三世紀の最後の十年頃というだけでなく、より細かく二〇六年頃のものだったならば、これもアイトリアが当時、調停者たちと急接近した証の一つとして数えてよいだろう。Cf. Sánchez, P. (2001), *L'Amphictionie des Pyles et de Delphes: recherches sur son rôle historique, des origines au IIe siècle de notre ère*, Stuttgart, p. 298.

⑮ Liv. 29. 12. 1.

⑯ Eutrop. 3. 19; Liv. 28. 11. 8-12. 9; Zonar. 9. 11.

⑰ Liv. 27. 10. 11-12 によると、二〇九年に元老院は緊急時であることを理由に、神殿にあった *aurum vicensimarium*、つまり奴隷解放の際に課せられていた五%税を基に蓄えられていた金塊四〇〇〇ポンド

を引き出し、五五〇ポンドずつを二名のコンスルとガルバなど三名の指揮官に分配し、その他を必要物資購入などに充て、急場をしのいだという。Cf. Hollander, D. B. (2007), *Money in the Late Roman Republic*, Leiden, p. 33. またLiv. 28. 11. 11にあるイタリアの農村の荒廃は、当然、物資の不足という状況を招いただろう。なお本稿で用いるポンドは、いずれもローマのそれである。

⑱ 拙稿［二〇一一］三九頁を参照されたい。

⑲ E. g. Polyb. 11. 24a. 1-3.

⑳ 拙稿［二〇一〇］一九―二二、二四―二六頁を参照されたい。

㉑ Liv. 30. 24. 3-4, 26. 12.

㉒ App. *Mac.* 4; Liv. 29. 12. 1-2. Cf. Polyb. 18. 38. 8; Walbank [1967], p. 599.

㉓ Liv. 29. 12. 2-3. なおこの頃イベリア半島の平定作戦がひとまず終結し、ローマ軍を率いていたP・コルネリウス・スキピオ（大スキピオ）が二〇五年度のコンスルを選ぶ選挙に間に合うよう意識しつつ帰還している（App. *Hisp.* 38; Polyb. 11. 33. 8）。またLiv. 28. 38. 5は、この時大スキピオが一四三四二ポンドの銀および大量の銀貨を持ち帰ったと述べている。Cf. Richardson, J. S. (1986), *Hispaniae: Spain and the Development of Roman Imperialism, 218-82 BC*, Cambridge, pp. 57-58. 註一七で述べたガルバの作戦の始まりの頃の金塊の緊急放出と併せて、こうした中でのトゥディタヌスの派遣と彼の新たな作戦は、ローマの軍事行動が多分にぎりぎりの資金繰りに左右されていたことを示唆する。そして少なくとも、二〇七年にハンニバルの弟ハスドルバルを破った際の戦利品として、二〇〇ポンドの重さの黄金冠と一〇〇〇ポンド前後の銀像数体を、二〇五年になってからデルフォイへと奉納している点も踏まえると（Liv. 28. 45. 8）、この時期ローマは資金面で一息ついたところだったといえる。

㉔ Grainger [2000], pp. 298-299は*IG* IX. 1². 1. 31 ll. 106-109. 3. 613 ll. 1-3およびPolyb. 13. 2. 1を根拠にスコパスが二〇五／四年度に三期目のストラテゴスに就任したと見ている。ただし*IG* IX. 1². 3. 613からスコパスが三期目のストラテゴスをどこかで務めたことは認められるものの、Walbank [1967], pp. 413-414が述べるように、ポリュビオスが同節で記す「ὅτι κόπας Αἰτωλῶν στρατηγὸς ἀπουγχὼν τῆς ἀρχῆς, ἣς χάριν ἐτόλμα γράφειν τοὺς νόμους, μετέωρος ἦν εἰς τὴν Ἀλεξάνδρειαν,（アイトリア人たちのストラテゴスであるスコパスはそれらの（負債減免のための）法令制定に挑戦したために同職を得るのに失敗すると、目をアレクサンドレイアへと向け）」の頭の部分には「ὁ κόπας τῶν Αἰτωλῶν νομογράφος」と改めるべきという主張がある。これが正しければスコパスは現存史料から確定している二二〇／一九、二一一／一〇年に加えてもう一期、二〇五／四年とは別のところでストラテゴスを務め、この二〇五／四年に四期目を得ようとして失敗したことになる。ただしこの場合、τῆς ἀρχῆς がストラテゴス職と解しづらくなり、政権奪還を諦めエジプトに向かうという流れも分かりにくくなる。現行の文だとこうした問題は生じないためあえて読み替えなくともよいようにも思われるが、この場合スコパスは連続してのストラテゴス就任を図ったと読め、アイトリアにこれを禁じる法があったかどうかは分からないが、そうした例も確認されないので、こちらはこちらで釈然としないものが残る。なおスコパスおよびドリマコスがノモグラフォスとして負債問題に取り組んだことは間違いなく、部分的には債務の帳消しがなされもしたらしい。Cf. Mackil, E. (2013), *Creating a Common Polity: Religion, Economy, and Politics in the Making of the Greek Koinon*, Berkeley, pp. 312-313.

㉕ ただしキュノスケファライ戦直前期の和平会議でのアイトリア側のフィリッポスへの要求からすると（Polyb. 18. 3. 12）、エキノスはそ

のままマケドニア領となったと思われる。

㉖ なおスコパスはエジプトに移って後、セレウコス朝によるプトレマイオス朝への攻撃が懸念されるようになると、後者の依頼でアイトリアに戻って傭兵を募り、二〇〇／一九九年までに、時のストラテゴスであるダモクリトスの妨害を受けるなどしつつも、歩兵六〇〇〇、騎兵五〇〇を集める（Liv. 31. 43. 5; Polyb. 13. 2, 15. 25. 16-18）。Cf. Briscoe [1973], p. 149. このことはプトレマイオス朝の給与の魅力や、当時のアイトリア市民の窮乏の深刻さを示すといえるが、同時にまたこれだけの人数が、必ずしも永久的にというわけではなかったにせよ国を出る決意をしたことは、スコパスやドリマコス、そして彼らの同調者と、この人々とは一線を画す者たちとの間に根深い対立があったことも改めてうかがわせる。

㉗ E. g. Liv. 26. 25; Polyb. 9. 40. 4-6.

㉘ Liv. 29. 12. 4-7. なお戦争末期の詳細はこのリウィウスの二九巻一二章が主な情報源となるが、先行研究は、彼はこれをポリュビオスの現存していない記述を基に書いたと見做し、大筋でその内容の信憑性を認めている。Schmitt [1969], Nr. 543; Derow, P. S. (1979), 'Polybius, Rome, and the East' *JRS* 69, pp. 6-7; Eckstein [2002], pp. 293-294. ただし後述する部分では、リウィウスが親ローマ的な心情から修正・加筆したのではないかという議論がある。

㉙ Liv. 29. 12. 7.

㉚ *IG* IX. 1². 1. 30.

㉛ なおGrainger [1999], pp. 356-357は二〇一／〇年にはハゲタス（あるいはアゲタス）がストラテゴス（二期目）に就任したと見ている。拙稿［二〇一二］註三七でも示したように、彼は同盟市戦争の最中に同職の一期目を務め、戦後しばらく政治の表舞台から去ることから、基本的にドリマコスやスコパスと政治的利害を共有する関係だったと判断できるため、このハゲタスが*SGDI* 2049に明示されるように二期目のストラテゴスとして再登場したことも、ドリマコスのそれと同じように、対マケドニア戦を主導した人々の勢いの強さの反映といえる。ただしこの*SGDI* 2049には時のデルフォイのアルコンがエウアンゲロスであるとはっきり記されており、Lefèvre, F. (1995), 'La chronologie du IIIe siècle à Delphes, d'après les actes amphictioniques (280-200)' *BCH* 119, pp. 205-206は消去法的にではあるが、*FD* III. 4. 175にも登場するこのエウアンゲロスがアルコンだったのは二〇二／一年のことと考えている。これが正しければハゲタスのストラテゴス就任も一年、ドリマコスのそれについても同様か、あるいはその前後数年のストラテゴス就任者が判然としない年にずらすべきかもしれない。

㉜ Liv. 29. 12. 8-10.

㉝ エペイロスがこの戦役に積極的に参加していたかは判然としないが、和平前にはアイトリアからアカイア、アカルナニア、ボイオティア、テッサリアの住民たちと同じようにマケドニア陣営と見做されており、またエペイロスの方でもフィリッポスに、参戦したイリュリアの反マケドニア派スケディライダスとプレウラトスの動きを通報している（Polyb. 9. 38. 5, 10. 41. 4）。

㉞ Liv. 29. 12. 11-12, esp. 11. アタマニアに関しては既に前章註三で述べた。アカルナニアの領土喪失については例えばPolyb. 9. 39. 2に出ている。

㉟ Liv. 29. 12. 12.

㊱ Ibid. 29. 12. 13. イリュリア方面の地理的事情とローマの活動、およびアティンタニアとの関わりについてはHammond, N. G. L. (1989), 'The Illyrian Atintani, the Epirotic Atintanes and the Roman Protectorate' *JRS* 79, pp. 11-25を参照されたい。

㊲ Liv. 27. 30. 12–13. Cf. Eckstein [2008], p. 97.

㊳ Liv. 29. 12. 16.

㊴ May, J. M. F. (1946), 'Macedonia and Illyria (217–167 B. C.)' *JRS* 36, pp. 49–52.

㊵ Polyb. 7. 9. 13–14.

㊶ Liv. 29. 12. 14.

㊷ Schmitt [1969], p. 283.

㊸ 拙稿［二〇一二］四六頁および註五一を参照されたい。

㊹ Habicht, Ch. (2006), *The Hellenistic Monarchies: Selected Papers*, Ann Arbor, pp. 4–6.

㊺ こうしたローマとマケドニアの副署名者たちや、後代の史家による情報の修正に関する議論、およびそれに関する主な文献については拙稿［二〇一〇］一二—一三頁、註四九で既に論じた。

㊻ App. *Hann.* 56a; Liv. 29. 10. 4–8, 11. 5–8. Cf. Erskine, A. (2001), *Troy between Greece and Rome: Local Tradition and Imperial Power*, Oxford, pp. 219–223.

㊼ 例えばギリシア人たちは遅くとも五世紀以来、本稿でも既に何度か登場した、有力者や著名人を中心とした外国の個人と自分たちの共同体を友好関係で結ぶプロクセニアの概念を形成し、外部における自国の支持勢力拡大などに頻繁に活用していたことがよく知られている。E. g. Mack, W. (2015), *Proxeny and Polis: Institutional Networks in the Ancient Greek World*, Oxford, pp. 1–4, 90–147. ローマにも外部の人間との友好関係を結ぶ概念として hospitium があったが、外交運営の一環として用いられることは、ギリシアとは対照的に基本的になかった。Nybakken, O. E. (1946), 'The Moral Basis of *Hospitium Privatum*' *The Classical Journal* 41, pp. 248–251; Badian, E. (1958), *Foreign Clientelae: 264–70 B. C.*, Oxford, pp. 11–12, 154–155. また Erskine, A. (1993), 'Hannibal and the Freedom of the Italians' *Hermes* 121, pp. 58–62が論じているように、イタリアに進攻したハンニバルが圧政者からの解放を掲げてイタリア諸都市に反ローマ蜂起を促した際にその反応が芳しくなかったことは (e. g. Polyb. 3. 77. 3–7, 85. 3–4)、三世紀末までのイタリアの人々（ローマ人も含む）が、本稿で取り上げたヘレニズム諸国の人々も行ったような、大義やスローガンを掲げ、それを利用しつつ国際的な多数派工作を行うという発想を持っていなかったことを示唆する。

㊽ Liv. 29. 11. 10, 12. 16. Cf. Eckstein [2008], pp. 111–112.

㊾ Liv. 29. 12. 16.

㊿ App. *Mac.* 4.

おわりに

第一次マケドニア戦争はローマにとって、カルタゴの脅威にさらされる中それに付随して生じた様々な困難の一つであった。この意味で同戦役はローマが全力を傾けるべき、あるいは傾けられる案件ではそもそもなかった。しかし多正面戦争を強いられ、あるいは利害の錯綜や派生的な問題が山積する中で難しい対応を迫られたのはフィリッポスや他のギリシ

ア人たちも同様だった。彼らが一定の成果を収めつつ終戦を迎えたのは決して必然的な結果ではなく、彼らが外交運営においてより積極的かつ技術や発想の面でローマより相対的に優れていたことにその理由は求められるべきだろう。実際ローマは東方諸国が調停に乗り出す直前、調停者の一角プトレマイオス朝と友好関係を強化すべく使節を派遣して贈物をするなどしていたが①、調停交渉の中では明らかにそうした接触を活かして同王朝や他の調停者たちとマケドニア戦争をめぐる利害の調整を話し合うということをしなかったか、あるいはそれに失敗した。こうした展開となった要因をローマの外交全体のありようではなく、調停者たちが活動した時期の大部分でローマ側の先頭に立ったガルバ個人に求めるべきであるようにも一見思えるが、既に見た二〇七年の交渉の様子からも明らかなように、彼の東方の人々への対応はローマ本国の支持に基づいていた。また後任のトゥディタヌスも、既に事態が概ね引き返せない段階になっていたとはいえ、ギリシアの外交をより深く理解していれば、軍事的なポテンシャルをなお維持していたことを活かし、ローマの面目を今少し守ることができただろう。ただフォイニケ和約に至る道は、本国の元老院を含めたローマの指導者たちの対応の拙さやあるいは対カルタゴ戦の重圧に少なからず影響を受けたといえるものの②、本質的には、ローマ側の悪手というよりは、錯綜する状況の中でギリシア側が軍事と外交をより有機的に結び付けつつ運営することに成功したことが、その帰趨を定めたと見るべきだろう。

こうした状況に対する同時代のローマ人の評価を史料的に論証するのは難しい。しかしながら、前章末でも論じたように、おそらく第一次マケドニア戦争に直に関わった人々を中心に、ローマ側は和平やそれに至る流れにおいて自分たちがいいように翻弄されたことを認識した。少なくとも、彼らは戦役の舞台となったギリシアの人々の多くから排除の対象とされたことによる不利益を強く心に刻んだ。というのも、カルタゴを降したすぐ後に始まる第二次マケドニア戦争において、ローマはその前夜から積極的にヘレニズム諸国へ向けて、ローマこそが第一次戦役後さらなる勢力拡張に乗り出したマケドニアからギリシアを守る者であるというプロパガンダを展開するからである。そしてカルタゴの脅威から解放され

より自由に使えるようになった軍事力を活かしつつ、数多くの東方国家をマケドニアから離反させ、最終的にはフォイニケ和約時とは一転して、キュノスケファライ戦まで必ずしも戦闘において失敗したわけではなかったフィリッポスを、軍事・外交両面で孤立させるに至る。そしてその実行を担ったのは二〇〇年度コンスルとして再登場するガルバ、東方に艦隊と共に送られたラエウィヌス、そして前述したように、使節として東方各国をめぐったトゥディタヌスだった。[③] こうした流れは、第一次マケドニア戦争期の東方での軍事・外交を直接担った彼ら三名と、そして同時代の他のローマ人たちが、自分たちがギリシア人たちにどう後れを取ったのかを理解し、すぐにそれを改め始めたことを強くうかがわせるといえる。そして第二次マケドニア戦争がローマの地中海東部における急速な勢力拡大の起点となったことを踏まえると、同戦役での軍事・外交の有機的な運営とその成功の元となったという意味で、この二〇五年のフォイニケ和約とその成立過程は、短期的にはローマの外交的な敗北であったといえる一方で、より長い目で見れば、ローマの外交史、そしてローマの興隆の歴史全体の中で、一画期をなす出来事であったといってよいだろう。

① Liv. 27. 4. 10; Polyb. 9. 11a. Cf. Walbank [1967], p. 137.

② 可能性のレベルでは、調停あるいは仲裁という行動をそもそもローマが嫌っていたことが調停者たちとの交渉が成功裏に進まなかった背景にあるというようにも考えられるが、既にEckstein, A. M. (1988), 'Rome, the War with Perseus, and Third Party Mediation' *Historia* 37, pp. 418-419やAger, S. L. (1991), 'Rhodes: the Rise and Fall of a Neutral Diplomat' *Historia* 40, p. 30が論じているように、それを裏付ける史料的証拠はない。

③ この詳細は既に拙稿［二〇一〇］の各所で論じた。

（日本学術振興会特別研究員ＰＤ（鎌倉女子大学　学術研究所））

The Peace of Phoinike in 205 BCE and Hellenistic Diplomacy

by

ITO Masayuki

This study explores diplomatic manoeuvres of the Hellenistic states in the First Macedonian War (c. 214–205 BCE), and, in particular, during the period from the alliance between Rome and Aitolia (211) to the Peace of Phoinike (205). Scholars have tended to argue that the Romans in the middle of the Second Punic War (218–201) succeeded in managing this conflict with Philippos V of Macedonia. Certainly, Rome prevented this king, an ally of Carthage, from participating in the desperate struggle against the Carthaginians in Italy. However, in 206/5 the Romans were deserted by the Aitolians, their ally, and as a result of the peace in 205, lost a part of their sphere of influence in Illyria although the republic was not defeated militarily. This was partly brought about by the fact that Rome wanted to concentrate on the conquest of Carthage, and felt it necessary to make some concession to Macedonia for a cessation of hostilities in the East. But Philippos also had to manage many enemies simultaneously. The peace cannot be considered the result of the successful tactics of the Romans but that of their failure in international politics. The validity of this theory is shown by the analysis of three factors: the diplomacy of Greek mediators, the rise of doves in Aitolia and their diplomacy, and Philippos' approach to these Greeks.

First, in the middle of the war against Carthage and Macedonia, Rome allied with Aitolia led by those with hawkish views toward Philippos. This alliance decreased his pressure on the republic by gaining the military support of the federation and its friends and riveting Philippos' attention on Greek affairs. Yet, the king, with his allies in the East, gained favourable results in the fighting around Greece from 209 onward. Several Hellenistic states, in this phase, appeared as mediators. They were actually apprehensive that a decisive victory for Philippos would lead to subjection not only of the Aitolians and their friends but all the Greeks. If Rome had paid attention to the aim of the mediators and given more support to Aitolia, these three would have co-operated against Macedonia. But the Romans did

not notice or disregarded it. They were content with riveting Philippos' concerns on Greece. This attitude led the mediators to argue before the Aitolians that their alliance with the Romans would cause disaster to all Greeks, and that the federation should annul it and make peace with Macedonia, one of the Hellenistic states. It is important that this was partly a result of antipathy of the mediators to Rome but was generally the best possible tactic to control Philippos' increasing power in the circumstances. In order to manage his rise, it was better to lead Aitolia to make peace with Macedonia before this federation would be defeated decisively.

Second, such a tactic of the mediators was also favourable to the Aitolians, in particular the opponents of the hawks. The argument of the mediating states enabled them to rise as the doves in Aitolia, and the federation itself to make an honourable peace with Philippos. Labelling Rome an enemy of Greece gave the opponents of the hawks a good reason to oust the hardliners leading Aitolia to fight with Rome against Macedonia from the centre of the federation, and to have friendly contacts with the kingdom. Based on many Aitolian inscriptions, in 206/5 the federation was controlled by the doves and appears to have asked Macedonia to make peace not as a vanquished party but as a partner against Rome.

Third, Philippos welcomed such a change in Aitolia, and soon made peace with the federation, which broke off with Rome, a decision clearly based on the cause of defending Greece. Other Aitolian allies had already retreated from the battlefield, and Rome was isolated in the East. Yet, it was unfavourable even for Philippos to continue to fight against the republic. The hawks in Aitolia opposed to Macedonia were still strong. Continuation of war could trigger their rehabilitation in the federation and a second attack on Philippos. The king, then, started peace negotiations with Rome through the agency of Epeiros. This state was seemingly a victim of the war because of its location, but was actually one of his allies. Philippos used this relation to make a favourable peace. As a result, the Romans were forced by the treaty arranged in 205 at Phoinike to deliver a part of their territory to Philippos.

In the First Macedonian War the Romans were not defeated on the battlefield, but failed to avoid loss of territory and damage to their reputation. The mediators, the Aitolian doves, and Philippos behaved more tactically and gained at the expense of the republic. The Peace of Phoinike was, therefore, a monument to the victory of these Greeks over the Romans not by force but with diplomacy.